



第61号

平成17年(2005)

10月19日発行

(年4回発行)

文音の功罪

青木秀樹

最近、連句に興味をもつ人が増えているように感じる。先日の日経新聞からの取材は、中高年の読者に人生のセカンドステージに役立つ情報を提供するという意図で、連句が取り上げられたもの。セカンドステージ予備軍の四十代、五十代の人を、記事の主たる対象としているとのことであった。

私の近辺に、既存の結社に所属しないで、仲間内で連句を巻いているという友人が何人かいる。それぞれ書物で学んだ知識を頼りに、自己流で連句を楽しんでいるようだ。体育会系をはじめとして、大学生が既存のクラブに入らず、自分達で同好会を結成するのに似ている。連句に興味はあるが、既存の結社は敷居が高いというのであろう。

連句は「座の文芸」と言われる。連歌、俳諧之連歌、そして現代の連句に至るまで、複

数の人間が一座して付け合うという基本的性格は変わっていない。緊張感のある競争と協調が連句の座の楽しさであり、一つの時間を共有した連衆に仲間としての親近感が醸成されることも座の効用である。連句の修練には座に参加することが早道であることは昔も今も変わりはない。

通信手段の発達、多様化により、いま連句の世界では文音全盛である。国民文化祭などの募吟では、応募の八割を文音による作品が占めている。一座して巻けば四時間半から五時間もあれば「歌仙」一巻を満尾できるものを、一ヶ月、二ヶ月、さらに半年以上をかけるものもある。

文音には連句制作から同時同場の束縛を解き放つメリットがある。文音は遠隔の人同士が自由に連句を楽しむことを可能にした。昼間仕事で拘束されている人でも、夜間に付句を考えることができる。病気や身体の不自由な人、身内の看病や介護で出歩くことが困難な人にとつて、文音は連句を楽しむほとんど唯一の手段であろう。最晩年の東明雅先生が、多くの中堅・新進の門弟に発句を送り、文音で指導をされたこともその例である。

文音では十分に考える時間をとれるので、凝った付け句ができ、知識や技を競う作品ができあがる。「一巻表より名残まで一体ならんは見苦しかるべし」(去来抄)といわれるが、序破急もメリハリもないこつてりの味の

作品が、募吟で多数受賞することも文音を盛んにしている理由かもしれない。

最近、ある募吟の受賞作品を連句協会報で紹介しようとして取り寄せたところ、入賞上位四作品のうち、「県知事賞」、「市教育長賞」の発句が起首の期日と全く違う季になっていたのには驚いた。

発句はその場の時宜に叶った即興性と挨拶性が必要とされる。従つてどの入門書でも発句は「当季」とされている。募集要項に記すまでもない式目以前の常識である。たしかに発句は表六句には禁じられている神祇・釈教・恋・無常・地名・人名などを詠むことが許されているが、発句の季が自由であるという説には接したことはない。一座して連句を巻けば、「発句の季は自由」などということはありえない。このような作品を応募し、それを入賞させるのは、文音ぼけといつてもよい文音の弊害だろう。連句の基本を忘れ、賞を取りたいという気持が先行する人が多いようでは、連句の将来もしたものだという気がしてくる。

連句の基本が座にあること、多くの連句形式が懐紙式に則っていること、式目がなぜあのか、など基本中の基本を忘れる連句愛好者が増えることは嘆かわしい。せめて、猫蓑会の会員には明雅先生がご指導くださった連句の基本を忘れないでいただきたい願っている。

連衆心とマナー

東 明雅

他門と一座する時の心得といつても、それにはマナーとメソッドの二つの面があると思えます。まず、マナーの面では同門と一座する時のマナーと変わったところはありませぬ。

例の「俳諧無言抄」(延宝二年刊)の「一座の法」(「連句辞典」七頁参照)は、俳諧の時代のものだけに、現代的でない所も多いのですが、人と和し文事を楽しむ事を主眼とする点では同じで、今日の連句の席でも参考になる所が多いのです。

それ故、他門の人を交えた一座では、一門同志の時よりも一層マナーを大切に、一門を代表するつもりで行動してほしいと思います。次にメソッドに関してですが、これははっきり言えば、式目運用の方法であります。猫蓑会には猫蓑会の式目(「猫蓑通信」第二十一号所載)があつて、皆さんも大体それに準拠して作品を巻いておられるのですが、他門にもそれぞれの式目があつて、必ずしも全国に統一したものはないのが実情です。

これは確かに不都合ですが、一面から言つと、連句とは、誰がどのような式目を使って作ろうが自由であり、そこに連句を作る楽しみもあるのですから、それを無視して、全国共通の式目を細かな点まで急速に決めようと

いう動きには同調できないのであります。

猫蓑会式目の中、問題となるものを左に列挙してみますと、

一、 人情自、人情他、人情自他半、人情無(場)の各打越及び編を嫌う。

二、 片仮名、アルファベット、数字の打越を嫌う。

三、 漢字止めまたは仮名止めの五連続を嫌う。

四、 拳句は発句に返らぬよう特に注意する。

五、 短句下七の四三及び二五を嫌う。

などが主たるものであります。右の五点は猫蓑連句の伝統があり、また、それなりの理由があつて出来たもので、それだけに会の中ではきちんと守られておりますが、他門では異論のあるところもあり、また、無視されているところもあります。

それ故に、他門の方の捌きを受ける場合はその捌きのやり方に従い、衆議判の席でも、猫蓑流を強調して、一座の響響を買わぬよう注意して下さい。

その一座で自分が捌く役になつても、右のべた五点には注意して、一座の理解と納得のもとに捌かれるようお願い致します。

近頃の連句の新しい傾向は、連衆がそれぞれ、自分の句の新しさを競い、奇を衒つて、他人が理解しようがしまいが、前句に付こうが付くまいが、そんなことは知ったことでは

ないという作品が多すぎるように思います。

また、句上げの数を競つて、多いのを誇りにし、月や花の句を他人に譲る心を失い、初心の人を助け導く優しさもなく、要するに座の文学たる連句にとつて最も大切な連衆心を失つた作品も多く、それでは座の文学としての本當の連句は亡びてしまふ外はありません。

付け勝ちは乱吟・出勝乱吟とも言つて、付ける順番があらかじめ定まっていなくて、各句ごとに連衆すべてが付句を考え、それを宗匠が捌いて治定する。一巡のあとは、良い句を作つたものが何句でも採用され、付け進むやり方です。この方法は連衆が互いに競いあい、常に活気が出る反面、初心の者は付ける機会が少くない上に、連衆は付け句の早さ、珍しさ、奇抜さを競つて、ろくろく前句との付味、打越からの転じを考える余裕がなくなりかねません。

これに比べて膝送りは、各自その付番が回つて来た時だけ付ければよく、他人が付けている時は、静かに一巻の進行を味わう余裕が出来、深みのある付句をすることが出来ます。また、他人と句数を競争するという雑念から開放され、出勝にくらべ静かに落ちついた雰囲気を楽しみ、さらには本當の連衆心を味わうことが出来るでしょう。

猫蓑通信28号及び

猫蓑通信40号より転載

猫養同人会作品

平成十七年六月十二日首尾
於 清澄庭園大正記念館

歌仙「江戸菖蒲」 副島久美子 捌

紫と白の競ふや江戸菖蒲 久美子
水面に映る紗袷の人 恭子
ギヤラリーの好みの版画売約に 碧
ペイオフ対策しつかりとする さえこ
誰も皆望の月など知らんぶり 利子
餌に新米幸せな猫 政治
根釣へと大型バイク連なりて 恭志
足より細いジープンをはく 碧
挑戦をします五十の再々婚 恭
若さ眩しい夫の寝姿 さ
煩惱のたましひ焦がす湯殿山 利
落武者の塚照らす寒月 碧
サッカーのハットトリック成就せり 志
ワイン一杯下戸は踊るよ 同
夢違観音像の薄笑ひ 同
筆の太さを問はぬ達筆 恭
小糠雨花のトンネル傘にして さ
残れる鴨に己重ねる 志
ナオ天長節みどりの日から昭和の日 利
コレステロール気にかける婆 恭
世界中シェフの目寿司に集中し 碧
郵政民営何が何でも さ
魔術師のあれよあれよと札が飛ばす 同

ただいま昼寝待つは一葉 碧
蚊柱も厭はず長き口づけを 恭
逢坂であひ歌坂で消え 利
営業のノルマ果して棒グラフ 恭
リカちゃん人形今風になり 同
星条旗何処にありや月の岩 志
早稲刈り終へてなに事もなく 利
ナリ独りごとぶつぶつ言ひて鬼貫忌 同
杜氏のふる里水清き村 碧
マチユピチュの旅はビジネスクラスにて 志
ケーブルテレビ液晶で見ると 恭
臥龍桜野点に花の霏々と降り 久
蝶の休らふ飛石の上 志

歌仙「ひいふうみい」 原田千町 捌

ひいふうみい四葩の恋の開き初む 千町
蜻蛉連れ飛ぶ池の連 敬子
肖像画イーゼルを立て描きあて 壽子
口にさつくりパイ皮の層 達子
気つぶよき植木屋さんの見てる月 暁巳
二百十日は何事もなく 同
万聖節うかと南無南無手を合はせ 壽
叔母のお供でイタリーの旅 達
火の山の海になだるる港町 巳
足裏つばに効くと看板 壽

宝籤当たってねぢがゆるみがち 達
談合いつかきつと洩れるぞ 巳
凍つる月愛の流刑地さまよへり 敬
角巻かづき逢ふが嬉しき 同
出て行つた福と帰つて来る亭主 壽
ホルンのチューブ5メートルほど 達
クラブ勧誘大学の花満開に 同
蹄の春泥落としやる藁 巳
ナオ清らなる川若鮎の影早し 英子
殿様代々名君の里 巳
陶片をあまた拾へり窯の跡 敬
遠くに在りて日本人なり 英
ラフカディオハーンの聴きし雪の音 壽
二の字二の字で夜這ひする奴 英
じわじわと妬く焼餅はもうやめて 巳
エキスパートの色の研究 壽
地球博キッコロの棲む森の夏 同
血液銀行危機を迎へる 達
神おはし月悠久の光ゲ仰ぐ 英
塩にこだはり酒と枝豆 巳
ナリ祖父傘寿厚物映を並べあて 敬
いつもの時間子等のジョギング 巳
海越えてインターネットでするバトル 壽
尻尾で返事名を呼ぶるたび 英
無常迅速夢幻泡影花吹雪 町
自転車で行く暖かき道 執筆
連衆 須賀敬子 杉山壽子 篠原達子 同
島村暁巳 佐古英子 同

歌仙「嬰の類」 豊田好敏 捌

桜桃のみごとな色や嬰の類 好敏
 自転車止める広き緑陰 渥子
 ピンヤピンヤとさざ波磯に戯れて 憲助
 塩のむすびにたつぷりな胡麻 路子
 しめりたるものを取りこむ宵の月 やすこ
 はねる蟋蟀やとつまみぬ
 墓洗ひ祈る暮らしの無事なこと 渥
 おれおれ詐欺もうまくかはした 路
 そら耳に君の声聞く午前二時 や
 告げずに愛を置いて来し山 同
 アパートの合鍵やと取り戻し 渥
 テレビサツカーひとり興奮 助
 月照らす野は一面の銀世界 路
 貧しき家に笠地蔵くる や
 ジンライム強き酒でも呑みやすく 敏
 首をふらねば吹けぬ尺八 助
 万博に山車揃ひぶみ花の下 渥
 綿菓子に似て春の浮雲 や
 ナオ内房の団扇を作るうから居て 路
 勘亭流で忍の一字 や
 年寄の株の行方が騒がれる 渥
 海賊船の漂へる海 路
 玉子酒熱る身体で飲み下し 助
 足袋を脱ぐ間もどかしげなり 路
 わけ知りとわけあり人の絡むとき 助
 精神科医は聞くが商売 や
 コーラスがストライキして幕あかず 敏

こめつきばったやたら頭を下げ
 歩を運ぶ通路の杖に月白し

築場の宿に落鮎を焼く 渥
 ナリ洋行の兄の土産はマトリョーシカ や
 もり、かけ、たぬき蕎麦の品書 路
 圭介の紅型の額やや煤け や
 八朔柑の甘さ増したる 渥
 尋ねたる夢の浮橋花万朶 敏
 鳴けよ鶯飛べよてふてふ や
 連衆 稲垣渥子 吉田憲助 倉本路子
 池田やすこ

歌仙「紀州青石」 久保田庸子 捌

苑涼し紀州青石水を溜め 庸子
 蛩袋に聴くは風の音 洋子
 ティーパーティーサンドイツチに旗さして アンズ
 ボタンひとつで動くロボット 秀樹
 天窓をさやかな月の渡りける あかり
 瓢の長さ競ふ家々 慶子
 角切りの鹿を押しさへる力瘤 洋
 ささやきの径今ぞ告白 樹
 縁談は星の数ほどあるものを 樹
 次男三男年ごとに減り ア
 転ばない先に買ひおく押し車 慶
 ニュージージーランドに移住決意し り

手作りのセーターふつくら縄編みに
 地吹雪止んで月の明るく
 じよんがらをいつも聞かせる北酒場
 カード捌いて占つてみせ
 花盛ん性善説を信じをり
 ご開帳なり導師参入
 ナオ百千鳥囀ることくクラス会
 ワトソン君がメモを取り出す
 迷宮の阿片窟には換気扇
 焼大福の屋台賑はふ
 御器嚙を敵のやうに追ひ廻し
 合戦跡に泳ぐ黒鯛
 困はれの身をもて余す七年目
 懺悔すませば次の恋する
 寛解の吾ゆつたりとカフェテラス
 岩波文庫活字大きく
 月の下内田百間踊り出し
 猫の屋敷に摘める秋草
 ナウ早生蜜柑産地直送届けられ
 虚礼廃止と壁に貼り紙
 老父母の勝手気儘の暮らしぶり
 待ちに待つてた温泉が湧き
 色重ね山懐の花万朶
 春の炬燵に留学の夢

歌仙「梅雨晴間」

二村文人 捌

週三日だけ登庁の知事

文

観覧車には寒月をのせ

靖

師を讃へ師を懐しみ梅雨晴間

文人

息子に習ひ新蕎麦を打つ

豊

賤語など習ふ若者

代

主のゐない籐椅子の猫

豊美

ナリ爽涼のジャズフェスティバル高原に

啓

細枝はせいっぱいの花盛り

義

エスプレッソ香り気ままにひろがりて

春恵

飛行機雲の消えてゆく空

恵

白子干しをり晴れの続きに

孝

通学路には兎らのさざめき

昌子

到来の土産の苞を御近所に

昌

ナオ雛納め矢大臣殿やや眇

代

背中から顔のぞかせる赤き月

文子

箱にため込むメンコビー玉

豊

潮流る海図にもなき島々を

義

秋の灯しのガラス工房

啓子

花名残外野は暇な草野球

人

ロシアの人の眠る悟真寺

孝

今年酒祝ふ輩に親族(うから)ども

豊

裾をからけて走る佐保姫

文

宵宮の喧嘩の種は女にて

孝

南極帰りの男長靴

文

連衆 高橋豊美 山口春恵 中野昌子

単衣あんまり粹に着るなよ

義

フェミニズム学会パネラー艶めいて

昌

橘 文子 小池啓子

洗っても落ちない過去と酒の染

孝

タトウの名前次々に変へ

恵

超現実で楽々と生き

孝

反芻を絶対しない哺乳類

同

天井裏魑魅魍魎の巢のありて

靖

八方睨む龍動き出し

同

歌も出るなり猫バスの旅

義

月冴ゆるダビンチの謎解き難く

同

月に振るフラスコ温泉研究所

孝

ポワロを呼んでクリスマススイヴ

豊

傭兵志願狭霧湧く中

代

貸衣装脱ぎ急行の通過駅

文

脈々と紆余曲折を夏の川

ふみ

ナリ木の実独楽よく泣く孫を持て余し

代

剥がれて揺れる募集広告

人

菖蒲咲きをり仕舞屋の軒

孝子

百研計算脳を鍛へる

靖

花の雲双頭の鷺ひたかくす

恵

自転車を手作りにする父子にて

常義

自治会の夜回りみんな仲良くて

孝

サイクリングのくぐる初虹

昌

多機能時計フアッションで着け

かりん

野菜さまざま描く水墨

義

ナオ小屋掛けて阿波の遍路のお接待

啓

亜麻色の夕映え薄れ昇る月

和代

眩暈するほど花浴びぬ禿坂

靖

姉貴に宛ててために書く文

文

雁渡るころ天領の山

靖子

遠霞みするピルの林立

み

切手には糊付ける派と舐める派と

恵

そぞろ寒シテ静々と三の松

代

遠霞みするピルの林立

ん

銃創ありしかの人の胸

啓

視線はすでに彼を捕へし

孝

遠霞みするピルの林立

ん

援交の少女と墮ちる蟻地獄

豊

運命の恋と分かった交叉点

孝

遠霞みするピルの林立

ん

熱砂に埋まるボンペイの恋

恵

蹴とばしてみて拾う墓口

孝

遠霞みするピルの林立

ん

パンを焼く匂ひに目覚む湖の宿

文

教科書にない営業の進め方

義

遠霞みするピルの林立

ん

重労働の酪農はいや

豊

ご本尊より檀家大事に

孝

遠霞みするピルの林立

ん

代々の校長の額見下ろして

昌

狐火を見たの見ないの村の衆

代

遠霞みするピルの林立

ん

歌仙「花みな白き」 鈴木美奈子 捌

六月の花みな白き驟雨かな 美奈子
 小さき詩集を包む夏帽 健悟
 姿見にネクタイ軽くととのへて ゆみを
 鼻巻きあげる象をデザイン 要子
 待宵の波打際に眠る貝 富美
 新酒いろいろ杯もいろいろ 麻子
 無患子に似たる男のいそいそと 悟
 落ちんばかりの初の結上げ を
 箱枕引っぱり出してリハーサル 麻
 相模の海はあくまでも風 悟
 再生の三宅の島の小学生 麻
 識字率ならまだトップなり 要
 過食から拒食に移る冬の月 悟
 水族館にまぐる回遊 富
 超一の踊る一遍念じつつ 富
 ジーパンの膝破く少年 麻
 花愛づる心寄り合ふ青テント 悟
 都市空間をよぎる姫蛇 富
 ナオ喜見城サイレン鳴らし海岸へ 麻
 勤務日誌の有給に丸 悟
 頭痛薬・医薬・膏薬・入眠剤 要
 娘に仕込むゴルフ・ピンポン 富
 わるい虫付かぬも悔し邪魔なパパ 麻
 銭より情あたら短夜 麻
 ひめぐとの有りて匹夫の成長す 富
 マクロファージの沈黙は金 要
 叱らるる度に居心地よき壺に 悟

観音様の救世のほほえみ

月昇る七重八重なる山の果 富
 誰に見せばや黒き木々の間 麻
 ナリてのひらにどんぐり独楽のこそばゆく 要
 BGMはハードロックで 悟
 チグリスの畔で子らにポランティア 富
 かへらぬものよ夢のまた夢 要
 明けぬれば三千世界は花の風 奈
 ばらもん風の泛ぶ中空 を
 超一 一遍の元妻 富
 ナオレガッタの勝利のオール掲げたり 淳
 熟年の星堀江謙一 泉
 ITを駆使して成果次々と 良
 お稲荷さんを祀る屋上 淳
 ダービーの順位予想は熱を帯び 男
 野外劇場フラメンコ舞ふ 泉
 へい彼女お茶しやうかとちんぴらが 男
 かまととぶつて落ちてやるわさ 泉
 しつぽりと濡れて烟れる山の宿 男
 駱駝に乗りて越えしトルファン 泉
 唐辛子今年の出来は色も良く 男
 月の沈める古井戸の底 泉
 ナリ芸術祭やっともらひし長官賞 實
 うからが揃ふ記念撮影 良
 来し方を偲びて酌める独り酒 泉
 自慢の和竿由緒あれこれ 男
 花罪罪と托鉢僧の門に立つ 淳
 羽音幽かに肩の姫蛇 弘
 連衆 本屋良子 梅田 實 上月淳子 男
 林 鐵男 青木泉子 執筆

歌仙「さぶさぶと」 松原弘子 捌

さぶさぶと青葉に眼洗はるる 弘子
 ついりの池に甲羅干す亀 良子
 威儀正す新入社員和やかに 實
 CD流しほっと一息 淳子
 解析のやうやくなりて望の月 鐵男
 野山の色に染め分けし布 泉子
 お持たせの銘酒に添ふる菊輪 泉
 越の訛で話しかけられ 良
 指長きシャンプーボーイ無口にて 淳
 何年ぶりか胸の高鳴り 實

猫蓑会例会作品

平成十七年七月二十日首尾
於 江東芭蕉記念館

歌仙「緑蔭に」 市野沢弘子 捌

緑蔭に入りゆく息を整へり 弘子
薄翅蜉蝣憩ふ石の上 碧
ひちりきを諸手で高く奏であて ゆみを
アフターファイブ予定いつぱい かりん
ビル群の谷間を覗く望の月 景翠
露けさ残る路地裏の道 士郎
行く秋の円空の跡辿る旅 丁那
リレーエッセイ綴るたのしみ
想ひつつ想はぬふりのつはものよ
高館に棲む姫の霍乱
ときどきは瑠璃色の酒飲みほして
六者会談またも流れる
岩山に狐狸の集ひたり
日記を買ひに月の釣橋
消しゴムで消したいほどの自滅点
無理に辻袂合はず二代目
海鼠壁静かにぬらす花の雨
茶摘の唄がCDとなり
ナオ芳草をパスタソースにからめさせ
大学はやめイタリアに住む
鷗外の吟遊詩人読み返し
城跡からは聞こえる午砲(ドン)
暗殺の企て洩るる夏のこと

那を碧ん碧那ん翠ん那郎を同那碧ん丁那士郎景翠

狂ったやうに乳房掴まれ
クリスマスイブの懺悔の不倫愛
はやりの細きジーンズをはき
けいたいを持たぬ子供をほめてやり
ぼんと外れる智恵の輪の鍵
月天心猫は尻尾を突き上げて
伊勢遷宮で帰る神官
ナリひたすらに丘を登りて秋惜しむ
風力発電風車遠近
少年はいつも鞆にハーモニカ
新型バイク試し乗りする
花浴びて来し方すこし軽くせり
いつしか沖に生るる蜃楼

連衆 松本碧 青島ゆみを 登坂かりん
岩垂景翠 横井士郎 浅賀丁那

歌仙「神輿渡御」 上月淳子 捌

深川や水掛け囃す神輿渡御 淳子
背くらべする路地の向日葵 靖子
再建のマスタープラン配られて 好敏
行きつけの店いつも賑やか 一恵
むく犬が尾を振ってる宵の月 實
松手入れする庭師てきはき 英子
村芝居村長さんは女形 恵
あの髻好きと投ず一票 實
姫抱きてイワン雷帝寢室へ 英
どつきりカメラぴかり閃光 敏

敏 英 實 恵 英子 實 一恵 好敏 靖子 淳子

海外に生産拠点移すらん
爆弾足に巻きつけし人
尖塔に届かんばかり月冨ゆる
ぬくき鯛焼入るるふところ
カルシウム食事何かと工夫して
菓の広告皆ほっそり
二歳馬を上げます如く花万朶
春のうららに宝くじ買ふ
ナオ魚島に大船小船集ひをり
お土産にする抱瓶の酒
転んでも口は達者な楽隠居
黒飴いつもポケットの中
新幹線真正面に夏富士を
静義経伝説の寺

出来ちやったバージンロード堂々と
またも懲りずに払ふ慰謝料
不器用な歯医者のかせに繁盛し
隣のピアノカデンツア弾く
月影に揺籃の児をあやしつ
作る楽しみ団栗の独楽
ナリ墓塚は段々畠に行儀よく
父の負債は順調に減り
苔払ふ日露の役の忠霊塔
梢揺らしてたはむるる風
散る花を誘ひ雀の飛び立ちぬ
ご飯一膳蛭味噌汁

連衆 関口靖子 豊田好敏 山崎一恵
梅田 實 佐古英子

英 淳 恵 實 敏 靖 敏 靖 敏 實 英 敏 恵 敏 靖 實 英 恵 英

歌仙「白南風」 橘 文子 捌

白南風の運ぶ海の香けふの庵

頷き合へる庭の夏萩

新しき画帳に筆を走らせて

長いエブロンちよつとはしよれば

C Dの鳥唄流れ弦の月

残る蜜をつかむ幼児

特産品酸橘一箱届けられ

バッグの紐が落ちる撫で肩

ラブメール馴れぬやりとりもどかしく

未来の妻は河内訛で

路地裏の踏み板鳴らし修業僧

どか雪の止む月の山間

喉通る寒九の水のしみじみと

やつと落着くローン終了

フィットネス友達増える後のお茶

特別席を作る球場

花盛り人も車も賑やかに

鍋いっぱいに釘煮いかなご

ナオ一度だけ朝寝朝酒浴びるほど

しつこい問ひに答ふ内科医

相続は贖作ばかりの骨董品

二人佇むボンテヴェッキオ

年の差は恋の邪魔にはなりませぬ

腹上死こそひたすらに請へ

冬帽子右脳左脳を刺戟して

バイリンガルで唱ふ豆撒

靖国と石綿問題紛糾す

郵便局は村の寄合

満月の雫を受けて高層に

双眼鏡で探る色鳥

ナリ秘湯とはよく名付けたり茸狩

舞の雅も落人の裔

つけ睫上も下もと中学生

手提げ袋にブラダ・エルメス

ポンチーと至福の刻よ花の昼

生命を祝ふ蛙合戦

連衆 繁原敏女 中村ふみ 式田恭子

滝沢三実 近藤蕉肝

歌仙「瞑想の」

青木秀樹 捌

瞑想の脳かき乱す溽暑かな

梅雨明け十日定まらぬ空

のんびりと物売りの声聞こえて

地図に載らない地名検索

蹲踞に更待月は動かさざる

松茸飯のふつくらと炊け

三河路に住みて落鮎取るほまち

破れた網をはためかす風

諳んずる君の最初の告白を

悪態つくも恋はゲームさ

ワープロの誤字がどんでん返しとは

相続放棄は時期が大切

公園の天幕の民冬の月

大道芸をはやす寒禽

養毛剤新製品を買ひ求め

あれこれ迷ふネクタイの柄

自由人花見の幹事引き受ける

幼なじみにもらふ猫の子

ナオお遍路の鈴遠ざかる峠道

大河アマゾン流れうねうね

屋根瓦修理日当二万円

胸の奥処に沁みる枡酒

温暖化地球の未来悲観する

青海亀の産卵の浜

ぐうたらな彼を誘って歩こう会

ハートマークのメールやり取り

妖怪の逢瀬はいつも丑の刻

月が昇れば蛇穴に入る

谷川の柞紅葉を掬ひ上げ

去来忌なれば嵯峨野散策

ナリ相伝の味噌の仕込みを長男に

ハーブティーにてしばし休憩

ロボットは球のさばきも軽やかに

柔軟体操午後の日課と

聖堂の続く並木の花浴びて

列柱めぐる虹の旋回

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

昌 媛

歌仙「走馬灯」 近藤 守男 捌

美しき森羅万象走馬灯

ふわりと翔びし薄翅蛭螂

指笛を習ふ子供ら息こめて

おさがりらしき野球帽つけ

平原の彼方上がる望の月

立ち喰ひをする焼きし唐黍

黄落の情報しきり巴里雀

リリーマルレーン歌の聞こえる

右側のストッキングを先ずおろし

隠れ黒子が少し艶めく

鳩除けの目玉を吊す物干し場

河豚ちりすると友を集める

冬の月少年の日の渡船跡

銀のクルスの人にあこがれ

結構な暮らししてゐるパラサイト

主夫の傍ら小説を書く

花衣畳紙の紐にじやれる猫

佐保姫さまの軽きハミング

ナオ春尽のハザードマップ地震の国

天然水はいつも宅配

罪深き者の顔して喫煙す

蛇も来てゐる大きな樹の下

冷やし飴人体の中おりてゆく

医師を追っかけ替はる病院

この想ひ爆発させていいかしら

暗号名はナイチンゲールよ

瘦せぎすの少し無頼の腕枕

火宅を囲む白壁の塀

槍穂高稜線月の渡り行く

昭和も遠くなりし残菊

ナリ御命講五升の酒を注ぐ墓

世界いづこも闇を抱へて

クリックでリセットしたき事ばかり

耳許過ぎる風が囁く

大学の百年祭は花の頃

ヒューと鳴きたる桶の蛤

連衆 鈴木美奈子 内田麻子 遠藤央子

佐藤良彌 佐々木有子

友とつつける牡蠣鍋の月

下町の商店街も持ち直し

湯屋の息子は山が道楽

花賞でて百年の知己のごとくなり

ひらひらと舞ふ黄蝶白蝶

ナオ抱卵期露座の大仏仰ぎみる

地ベタリアンは駅にたむろし

ビー玉をふんで転がるお年寄

集中豪雨残る爪痕

軒先に暑さにたへる猫五匹

ビキニで眺む素裸の富士

寄する波君の名前が消えてゆく

ますます思ひ募らせる酒

あと二年離婚分割まぢますわ

延期いつまでシャトル打上げ

応援の横断幕に月かかる

元結切れて勝ちし関取

ナリ故郷の八幡宮を拝む秋

鎮痛消炎貼り薬買ふ

マイブーム今はネットでオークション

ちんちん電車街をゆったり

異国語のあふるる万博花吹雪

マンモストラボのうららうららと

歌仙「たも持つ児ら」

杉山壽子 捌

向日葵やたも持つ児らの声とんで

子連れの鷓の泳ぎくる沼

奥座敷俳席いよよ整ひて

お茶受けに合ふ御前羊羹

月美しと独りごちする帰り道

冬仕度する袖の村々

遠く来てべつたら市の賑はへる

あの娘の脚の形すんなり

愛知県婦警の制服素敵なの

犬も喰はない熱い抱擁

すまないと頭下げてる工事の絵

ぼろんぼろんと弾きしウクレレ

ポーナスが出たらハワイへ行くことに

郁

志

豊

路

要

郁

壽

豊

志

要

路

壽

郁

豊

志

要

路

郁

路

豊

志

壽

要

歌仙「杉風忌」

島村曉巳 捌

木場抜けて小名木尋ねん杉風忌

曉巳

ひと吹き入るる襟の涼しさ

孝子

高低のアカペラの技競ふらん

了齋

パーコレーター香るキツチン

冬乃

肩の荷を湯桁にあづけ月の宿

節子

残る螢を子等が見つけた

雅子

り ましら茸効いた効いたと大和尚

乃

賢愚の境はぐらかす紅

孝

愛なのか友情なのか微妙です

齋

土のいらぬ野菜よく売れ

雅

トラックが牛舎の斑積んでゆく

孝

息災祈り毛糸編む母

節

旋盤の切屑寒き月の窓

齋

普通の人がテロの犯人

雅

山巖のルルドの水に列長く

同

うちが元祖であれが本家よ

孝

高座から出囃子漏るる花の宵

同

春の炬燵にまた舟を漕ぐ

齋

ナオ 霧晦るハローワークに人あふれ

節

金砂銀砂をネールアートに

孝

沙翁劇和様脚色新機軸

乃

森作ろうと樹を植ゑる会

同

振花に問はぬ振れの右左

齋

怒る雷神齋を出すなと

孝

床上手思ひ知らせる夫の留守

乃

ぬるぬる滑る油屋の恋

孝

故郷の味のしみたる堅豆腐

雅

立てかけてある古い自転車

尼僧院冬の仕度も月浴びて

節

雁の音混じるカリヨンを聴く

齋

ナウ 新絹をファッションショーでふんだんに

孝

気をつけませう骨粗鬆症

雅

泥棒の稼業そろそろ退けどきか

齋

魚臭は消えず洗ってもなほ

孝

ご朱印船発ちし湊に花筏

巳

朝茶の席に満つる囀

乃

連衆 坂本孝子 鈴木了齋 百武冬乃

乃

長坂節子 武井雅子

乃

歌仙「ねこ会議」

青木泉子 捌

梅雨明や有心無心のねこ会議

泉子

鈴を鳴らして過ぎる涼風

健悟

ステイ先ガイドブックで探しみて

如代

和服をたたむ手際あざやか

ジョウ

月代に白波揺らす舳ひ舟

達子

鱸膾で友と酌む酒

わこ

り こほろぎを跳ばして遊ぶ地下の書庫

悟

パソコンの中美女とゲームを

代

そこはダメちよっとまってとうれしがり

こ

家具を揃へて迫る入籍

同

江戸大火焼け残りたる井戸茶碗

ウ

狐の提灯あかあかと月

代

直木賞とったあいつのしたたかさ

こ

リポビタンよりリゲインが効く

週末はカラオケ仲間集まって

達

主婦にもほしい主婦の手伝ひ

ウ

立ちて見つけ寝て見つけ夢の花衣

悟

双つ蝶々間に重なる

こ

ナオ おじいさん！ハイジ駆ける春の牧

ウ

ロッキングチェアパイプ燻らす

代

人間の裏がおもろい相場道

悟

腑分けの元は骨が原にて

達

ゆるやかに金魚運動してゐます

泉

川のながれのやうに生きたい

悟

笹の葉にまんぢゅうひとつ包み込み

ウ

托鉢僧に渡す恋文

こ

抱かれて湯冷めするよと囁かれ

代

弾き語りする甘きシャンソン

達

B面に山谷あるか月の影

こ

おでこに來ても打つな哀れ蚊

悟

ナウ 「紅葉狩」シテ仕る能舞台

代

屏風開けば海の広がり

ウ

農業をせんと故郷に帰る記者

達

何を入れやうタイムカプセル

代

神の手のタクト一閃花降らす

泉

かげろふのなか交す挨拶

執筆

連衆 佛洞健悟 伊勢本如代 林ジョウ

ウ

篠原達子 横山わこ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

歌仙「白南風や」 鈴木千恵子 捌

白南風や仁王阿吽の口を吹く

千恵子

読経にも似て続く蝉吟

千町

鉛筆を切り出しナイフで削りゐて

常義

書き取りテスト次は百点

加津枝

国訛ときをり混じる望下

一枝

秋の扇を帯に差しこみ

利子

初狺を待ちかねてゐるポインター

町

柔なハートを狙ひうちする

利

ここいちばん電車男に勇氣受く

加

面接のこつよく徹る声

義

立会も機械化されるご時世よ

利

野暮用のまだかたづけかぬまま

町

ナフタリン匂ふセーター月の夜

義

くっさめ二つ誰のことだろ

一

吞舟の魚などとんと聞きもせず

町

建築続くガウディの塔

一

花の下紅茶軽めにダーズリン

町

小さき膝の並ぶ雛の家

利

ナオ空高く吸ひこまるがに蝶の飛び

加

うちの分だけ有機農業

町

命よりまづはグルメの止められぬ

同

蠟人形の肌はひんやり

一

大桶を蛇しゆるしゆると登りゆく

利

すぐかつとなる女かはゆし

義

回し蹴り跳び蹴りもでる痴話喧嘩

恵

ひとりですする甘いリキユール

町

カットグラス江戸と薩摩の技競ふ

加

下屋敷守る家老実直

月さやか思ひ出の数員となる

一

冬支度する縄文の人

町

ナラそぞろ寒身体髪膚そこそこに

義

栄養ドリンク呷るキヨスク

一

おもしろくなき世をいかでおもしろく

利

収束しない無限級数

義

甕覗き花の一片散りこみぬ

恵

春シヨールかけ会ひにゆく友

加

連衆 原田千町 生田日常義 村山加津枝

西田一枝 武村利子

初捌の思い出

上月淳子

初捌の頃のことと、聞かれてもさて何時だったかしらと、考えてしまう程、昔のことになった。確か昭和六十年頃だったと思う。A.C.Cのお教室に入つて、二、三年目位のこと、その頃はお教室も人数が少く、明雅先生がお講義も実作も、教えて下さっていた。半年に一度位、二、三卓に分けて捌の練習があり、二時間で半歌仙一卷を巻いた。その時私にもと云うことでさせて頂いたのが、初捌である。今はもう亡くなった秋元正江さん、米谷貞子さん等が連衆に入つて脇を固めて下さった。ベテランの方達が、流れにも、障りにも気を使って下さって、私が困らぬ様上手

に導かれた様な気がする。二時間の間、大変緊張していたが、半歌仙を捌き終えた時、何とも云えぬ充足感を持ったことを覚えている。終った時、感想は、と聞かれて「捌って面白いものですね」と御返事をして、先生をあきれさせたことだった。それまで句を付けることと、お講義を聞くことで勉強して来たわけであるが、捌を経験することで、全体を掴めた云うか、連句を展望することが出来たやうな気がする。

その時の作品がどんな物だったのか、すっかり忘れていて思い出せない。引越しをした時どこか奥の方にしまったままの様で、此處に書けないのが残念である。今見たら欠点も多く、見るに耐えない物なのであらうが——明雅先生がよく、云っていらつしやつた言葉に、泳げない者をいきなりプールに抛り込む様な教え方と云うのがあるが、まさにそれで、まだ碌に式目も去り嫌いな、よく呑み込めぬ人間が捌をさせて頂いたのだから、連衆としてつき合つて下さった方には、さぞ御迷惑を掛けたことであらう。

それから廿年余、私は連句にはまっ生きている。捌も教え切れない程させて頂いたし、連衆として巻いたものも数多い。その原点が、A.C.Cでの半歌仙にあるのだと思うと今更ながら、明雅先生の御恩を思う。

佐々木 洋

温泉で有名な別府に住みついて三十年、連句とめぐり会って十年が過ぎようとしています。

私と連句との出会いは故佐々木均太郎先生が大分合同新聞に「連句を始めてみませんか」という記事を連載し始め、それを目にしたのが始まりです。国民文化祭連句大会を初めて大分県で開くことが決定され、佐々木先生が連句の説明と付け句の募集を始められたのでした。

当時、私は大分の素晴らしい海や山のとりになり、休みの日は山野草の写真撮影か釣りに出かけるという日々を過しておりました。そして、この美しい風景を俳句で残せたらと思いいNHKの通信教育で俳句を勉強したり、地元の句会に顔を出したりしておりました。しかし、どこの句会も多人数で初心者ばかり相手してもらえないムードで足は遠のきました。その反動で佐々木先生の連句の付け句の募集には必ず応募するようになりました。

そのうちに佐々木先生が大分市で連句会を立ち上げ、別府市でも連句会が発足することとなりました。私にも声がかかり、恐る恐る参加しました。出席者はいつも十名前後で、先生の丁寧な指導があり、緊張の中にも笑い

声が絶えることなく、のめり込んでいきました。先生はお酒をよく嗜む方で、私も大好きな方なので、連句会のあとは決って飲みながらの反省会というカラオケ大会でした。

そして先生の見識と人望を慕って県下各地に連句会が発足しました。ところが、これからだという三年前に先生が体調を崩され、昨年お亡くなりになりました。突然に指導者を失って大分県の連句人口は減少し、別府の連句会も一時は開店休業状態でした。

しかし、先生のまかれた種は各地に根づいており、現在も五カ所で定期的に連句が巻かれています。別府でも残った半数の会員に新会員が加わって定期的に半歌仙を巻いています。

私達は首都圏からはるか彼方の地方にいて勉強の機会には恵まれません、美しい自然に恵まれています。私は別府市の中心から少しはずれた住宅街に住んでいます。家から三十分も車を走らせれば郭公の声がきこえますし、時鳥の声は一日中、家の後方の山より聞えます。春は翁草十五センチほどのえひめ菖蒲。秋には七草は言うに及ばず、ヒゴタイやリンドウなどが咲き乱れます。市内後方の山際には一日中湯煙が立ち登っています。関アジ、関サバの豊後灘もすてきです。

四月の中旬に、私達の湯煙連句会の主催で湯布院の塚原高原連句会を催しました。会場の貸し別荘の隣の空地にはかわいらしい、春

竜胆があちこちにかたまっており、翁草が数本お辞儀をしていました。参加者の感想はほとんど「来て本当によかった」でした。私も「心が洗われながら連句ができた」という感想を持ちました。

この経験を元に大分県連句協会へ月見連句会とカッコー連句会（ともに一泊）を提案して受け入れられました。十月に県南の大入島で月見連句会を開く準備が進められています。来年の五月には久住高原のどこかでカッコー連句会が開かれるでしょう。

大分県では、いろんな事情から半歌仙ばかり巻いてきました。歌仙の経験は一部の人を除いて、ほとんどの方が経験していません。この一泊の連句会を契機に歌仙へも積極的に挑戦していくことも計画しています。ちょうど「ねこみの」六十号に東明雅先生の「現代連句と序・破・急」が掲載されましたので資料として利用させていただこうと思っっています。

地の利を生かした景勝の地での連句会を大いに実行し、連句の実力を向上させたいと考えています。そして、大いに心も磨いていきたいと思うこの頃です。

尾張案内

西脇智子

ぜびぜび連句の大先輩に尾張名古屋でご教授いただけたら、と願う気持ちは名古屋人なら、野水も荷分、私も変わりない、と思いません。が、名古屋で詠まれた芭蕉さんの発句、

狂句木枯しの身は竹斎に似たるかな

の如き七色の変化球を投げられて、さつと

たそやとぼしる笠の山茶花

と打ちかえす実力のない私。せめても、皆様に名古屋よいと二度はおいで、と、おすすめスポットをご案内し、お招きする次第でございます。

名古屋駅より東へ電車で三十分程行けば、話題になった「愛・地球博」開催地、長久手・瀬戸方面へ。それを180度真反対の、西へ電車で三十分程行くと、津島・佐屋あたり

に到着します。佐屋は、芭蕉さんが水鶏の鳴く声を聞くことができるかもしれない、と(当時もなかなか聞くことができなかったのでしょうか。)わざわざ逗留した地で、半歌仙を巻いたときられています。その発句は当初「水鶏鳴と云へばや佐屋の浪枕」であったそうですが、厠に立ち、座に帰ってすぐ

水鶏啼と人のいへばや佐屋泊

と、改めたそうです。この厠から帰ってすぐ

直した、という芭蕉さんにとっても親近感を私は覚えます。

その佐屋には今、当時を偲ぶ石碑が遺されていますが、それを記念して建てられた茶亭が、2キロほど離れた津島の機石荘というところに「水鶏庵」として移築されています。芭蕉さんの真筆と伝えられている懐紙軸は別のところで保管されていますが、その写しをこの水鶏庵で見ることができます。機石荘のお庭には、「水鶏庵」の他「曲肱庵」「妙喜庵」というお茶席も保存されており、150坪ほどの庭は町中とは思えぬ静かな佇まいを見せています。

この機石荘、所有していらつしやる方が実は隣接している「水鶏庵」というお蕎麦屋さんのご主人でもあります。お店の奥の予約席の方にいられていただくと、お庭を自由に見ることが出来ます。江戸時代より伝統の重箱そばをいただきながら(田舎蕎麦風でおいしいですよ)、今もこのあたり、昼間ならあちこちで見ることが出来る水鶏の鳴く声を、もしかしたら聞くことができるかもしれません。ぜびぜびお立ち寄りください。私も皆様とお会いできる日のために、くいなきよう、連句の勉強にはげみたいと思っています(?)。

猫養作品集第十六号原稿募集

猫養会員の捌き作品

平成十七年の作品

一人一卷 形式自由

応募用紙はB4判の定型を

配布します。コピー可。

締切り 平成十七年十一月末日 厳守

ワープロによる原稿も受け付けますが
B5サイズ A4サイズ のものは
B4に拡大して提出して下さい。

ウ ナオ ナウは記入

番号 季 自他場 は必ず抹消して下さい。

送り先 〒20210012

西東京市東町4-4-28

80424-23-7817

鈴木千恵子

本年度より猫養作品集の担当者が代りましたので、ご注意下さい。

古賀一郎さん

鳥村暁巳

一郎さん、あの愉しかった五月の横浜アヴァンが最後の座になろうとは、恒例の呑み会への途中、古本屋をのぞきながら「この通りはいい通りだなあね暁巳さん！」と、とても嬉しそうでした。そしてそれまでに頂いた横浜への挨拶句も素敵でした。

初時雨閑帝廟の赤と金

一郎

鳥雲に原三溪の夢の跡

全

初対面はカルチャーの連句教室で、それから十一年余の日々でした。後からわかったことですが、二人は共通点が多かったですね。昭和八年生まれの山の手子ながら親は江戸下町系、疎開経験あり、粗忽者、照れ屋など。座を重ねるごとにどんどん親友兼悪友に。悪といえど江戸っ子の照れからくる口の悪さもお互い様で結構舌禍を起し、口喧嘩や激論も大いに楽しみましたね。

小春日や猫の伸びする箆笥町

一郎

木枯や裏返されし足袋の列

全

しかし貴兄の博識には心底脱帽でした。古今東西足跡至らざるはない経験と学識からくる蘊蓄は卓抜なユーモアに包まれ一座の興はヒートアップ！連衆には得がたい愉悅の刻でした。特にワインには一家言あり、安くておいしい一瓶を差入れては女性から高得点を稼いでいましたね。たまに欠席すると「あら一郎さんがゐないわね」の残念そうな嬌声が上が

がってましたよ。しやくだから教えてあげなかつたけど。

見たんです真つすぐ後ろに歩く蟹

一郎

望の月ニケの女神は翼ひろげ

全

騙し絵の窓に梯子をかけた奴

全

またよく式目の議論をしましたね。あまりに保守的な私に業を煮やし「歩く式目」と命名されました。この渾名は結構気に入ってます。議論を戦わせながら私は貴兄の古典就中俳諧の造詣の深さに驚嘆しつつ応戦に大奮闘でした。猫藪会いや連句界は大きな人材を失った、と実感は今痛切に迫ってきます。

またTBSの名ディレクターだった一郎さん

は、恋句、述懐などの人生観照句がとても上手でした。そして一郎さんが「アハハ、こ

りやおもしろいや」と言ってくれた時は、とても嬉しかったものです。

火の恋し人なほ恋し無人駅

一郎

平凡がいいねと月を仰ぎある

全

はげという種をお膝に使ひ分け

全

とある理由今日追はれたる尼僧院

全

肉置きわけの秋の別れを汲み尽くす

全

やや寒の paradocks といふ遊び

全

冬の蠅パンの耳喰ふ老いの月

全

いざ行かんメビウスの輪の裏表

全

物言はぬ人ばかりあて憂国忌

全

一郎さん！もう会えなくてとても寂しいけどわれわれ連衆はあなたの物腰、含羞のまな

ざし、そして何より「人間大好き」の明るい

ユーモアを決して忘れません。思い出を胸に連句の道にいそしみます。見守って下さい。

あの世では先生始め皆さん大歓迎ですよ。

だから一郎さんはこんな句を詠んでいたんですね。

秋澄むや閻魔相手にご再考

一郎

花ですよ笑つて下さい閻魔様

全

口元に笑みのこります弥勒様

全

山装ふお地藏様の涎掛け

全

人生の黄昏時に一郎さんに出会い素晴らしく充実した刻を一緒に出来た私は大の果報者

です。一郎さん！さようなら、そしてありがとうございました。

どうぞございました。

土良の会夏SP・イン江ノ島

林 鐵男

今年も十八名の参加を得て八月五日・六日の両日、かながわ女性センターにて「土良の

会夏SP・イン江ノ島」を開催した。恒例行事とな

った夏SP、以前は関東近県のいろいろな場

所をめぐっていたが、最近はこの女性センタ

ーを連続して会場としている。

あづまはや吾に答へよ炎ゆる陽よ

一郎

この発句は平成七年鶴巻温泉の大和旅館に

おける土良の会夏SPでの作品である。昨年

は元気な顔をみせてくれた一郎さんの顔がみ

られなくなってしまうのは実に残念であつ

た。参加者は彼の佛を偲びつつ両日にわたり

歌仙三、半歌仙三、短歌行一、二十韻一、表

合賦酒恋一の計九巻を首尾した。

伊勢派散策⑥「馬場凌冬」 橋 文子

蕉風の正統を継ぐ

先年、伊那の芋庵美紗宗匠によつて、呉竹園馬場凌冬百回忌追善興行が盛大に営まれたことは記憶に新しい。

凌冬、名は学之丞、天保十三年（一八四二）信州伊那市狐島生まれ、祖父如苞、父如竹とも俳人であつたことから、早くから俳諧に親しみ、明治十三年、妻女と共に京に上つて、最後の俳諧師と言われた洋水園芹舎の門に入つた。翌年一旦帰国したが、その年十月再び京に入つて越年、明治十五年には師の許しを得て、西国行脚に出た。頭を丸め、懐中無一文で頭陀袋をさげ、俳友を訪れるという旅に辛苦を重ね、大阪、広島、四国、近江路、北国へ、加賀、越前、越後から信州へと、漸く伊那へ帰つたが、この間百数十巻の作品を巻き「旅観」という一集を発行した。

明治二十一年の関東行脚では、七ヶ月の間に百余巻に及んだ。

明治三十一年二月、門人により句碑が建てられ、彼はその記念に「竹園隨抄」を刊行した。

彼は温厚篤実、蕉風伊勢派の伝統を継ぎ、後、伊那の地に円熟社を興し根津芦丈ら弟子の養成に尽くした。明治三十五年（一九〇二）九月六日六十一才にて没。竜東靈園（伊那市伊那公園東側）に眠る。

撫子や 両吟

撫子や咲ふりに名のあやまたす

馴れて村なく温るうち水

旅笠の仕度疾くより気配りて

羅ひし魚に利す薄塩

吹き送る雲間の月の見え隠れ

早稲はしつかり物と成りけり

司召首尾よく濟みてあとの酒

捨言葉にて嬉しがらせる

今更に引れぬ恋の人頼み

河豚とうなつく窓の目くはせ

積て有炭の俵の雨暴て

通り少なき足柄の閑

星月夜 両吟

見透して歩橋越すや星月夜

啼やむむしに寒き立待

雨のあと尾花は何処も皆散て

二合半酒のはやさめにけり

思ふ函に出代る口を取定め

家普請多き春の賑ひ

山吹につづいて藤の咲きかかり

恋を心に遊ぶ湯治場

親に似て愛想はあれど背の低き

一寸広げて傘をかす

×の鶉ほどにも足らぬ矮鶏

気楽にくらすならば下町

月さして涼しう成りし膝がしら

清水も音の立て流るる

建物の皆古風なる本門寺

年は寄ても元氣よき爺

烈しさに足もはこべぬ花吹雪

野はちらほらと田打畑打

群がれば虹の声さへ騒がしき

碁にも倦たか寝転て居る

反古張の窓に昔を思ひ出し

須磨と淡路は跨げさう也

青々と冬も気高き松の色

流行神まで留守は淋しき

芳れても足の軽いは爪下り

島田の油よい香散かす

妬ましく思はする迄睦まじく

見かけを飾る茶屋の衝立

貝殻も真砂も光る月の照

栗をせせるか鼬又啼

尋ね来る人さへもなく秋更て

叱れどきかぬ甥の放埒

浮雲しとあとを見送る高足駄

棒鼻からは道は半みち

誰も皆うらやむ花の中の家

きのふもけふも多き鮎汲

明治三十四年十二月 満 尾

（四年目にして両吟を許され、二巻目の作品の由）

根津忠史氏提供

犬の子の葉先喰ひさく芭蕉かな

風に驚き穴に入る蛇

